

かたつけたくないホールデン

— 『ライ麦畑でつかまえて』を整理学の観点から考察する

関 戸 冬 彦

はじめに

本稿はJ. D.サリンジャーの小説、『ライ麦畑でつかまえて』（以下『ライ麦』）の主人公ホールデン・コールフィールドの言動を整理学の観点から考察しようと試みるものである。まず、作品および物語の流れに触れながらホールデンの基本的な言動の特徴をいくつかの場面を具体的に取り上げて精査する。次に、本稿での援用として重要な位置づけとなる整理学、ならびに類似する概念としての「かたつけ」とは何か、について記す。その上で、その概念や視点から『ライ麦』を改めて読んでみると、ホールデンがあえて「かたつけ」ないことで自分自身、特に時間という概念、を「かたつけ」ようとしているのではないか、という仮説が浮かびあがる。本稿ではその点に立ってホールデンを、そして『ライ麦』という作品そのものを、考察してみたい。

1 判断を躊躇うホールデン

『ライ麦』はこの作品の主人公、少年ホールデン・コールフィールドが高校を放校処分になった後にクリスマス直前の冬のニューヨークの街を数日間あたかも放浪するかのよう闊歩する物語である⁽¹⁾。登場人物は物語中のリアルタイムにおいて、またホールデンの記憶の中の時間に存在する

(1) 『ライ麦』に関する執筆者の研究としては、直近の別論、「ライ麦畑ではげまして—『ライ麦畑でつかまえて』と励ましとの相関性に関する一考察」（2021）もある。この論文では主にホールデンとフィービーの関係性について着目し、励ましをキーワードにして作品を論じた。

ものも含めると、多々現れはするものの物語としては一人称語りなので出来事や登場人物たちの言動は全てホールデンの語りによって進行、再現される。本稿では特に、ホールデンの判断という部分に着目したい。なぜならその判断にまつわる言動が本稿での論の展開の起点になっているからだ。

まずはホールデンの電話をかけるという行為について見てみる。9章の冒頭で、高校の寮を飛び出し、電車に乗ってペンシルヴェニア・ステーションに着いたホールデンは「まっ先に僕が何をしたかというのだな、まず電話ボックスに入ったんだ。誰かに電話したいと思ったんだ。」(94)と言って、誰かに電話をかけようとする。ところが、妹のフィービー、ジェーン・ギャラハーのおふくろさん、カール・ルースなど複数、電話をかける相手としての候補の名前を挙げはするも、「誰にもかけずじまいに終わったわけさ。」(95)とその判断を翻している。そしてホテルへと移動した後、再度「ジェーンの奴に電話をかけようかかけまいかと、ちらちら考えだしたんだ」(100)と言うものの、「僕が気のりしなかったからなんだ。」(100)とやはりここでも電話をかけようとしてやめている⁽²⁾。

つぎに、ホールデンの女の子に対する姿勢を見てみる。ここでも、しようと思ったことを直前で翻すことは先の電話をかける、かけないと同様によく起きる。13章でホテルに戻った際、エレベーター・ボーイから売春婦はどうかと持ちかけられると、「そんなことをするのは僕の主義やなんかに反するんだけど、なにしろ気が滅入っちゃって、考えることさえできなかったんだ。」(142-143)と言い訳めいたことを言いつつもボーイからの誘いを承諾してしまう。そしてサニーという女性が部屋にやってくるのだが、いざサニーが(売春婦としての)仕事に取りかかろうとすると、「ちょっと話をしないかね？」(149)、「今夜はどうも気がのらないんだ。」

(2) 物語においてはその後、何人かと電話で話してはいるので、作品中ずっと誰かへの電話を決してしない、電話が通じない、ということではない。

(150)、「やめてくれないかな、そんなの」(152)と呼んでおきながら結局自ら彼女との身体的接触を拒み、代金は払うからと言い張って実際に払った後に、サニーは文字通り何もせずにホールデンの部屋から出ていくことになる。つまり、しようとするが判断を翻してやめる、という結果になっている。

なお、このやりとりの直前にホールデンの回想が挟まれているのでそこも合わせて見てみると、「実を言うと、僕はまだ童貞なんだよ。」(144)と自分の性的関係のことについて告白めいた発言をした後、性的行為ないしそれに準ずる行為に及ぶ際の不安感のような気持ちを吐露する。そうした経験がないことへの怖れのようなエピソードとして、「もう少しでそうなりそうなところまで行くと、たいていの場合、女の子のほうで、やめてくれって言いづけるんだな。僕の困ったところは、そこでやめちゃうんだよ。」(144)と言い、さらに「けど、僕は、やめてばかしいんだよ。…やめなきゃよかったといつも思うんだけど、やっぱ僕はやめてばかりいるんだ。」(145)と自ら途中でやめてしまうことを繰り返し口にしていく。

上記のふたつの例、電話をかけようとするも結局かけずじまいに終わることと、女の子と性的関係を持つようとするも途中でやめてしまうこと、からもわかるようにホールデンの行動パターンとして、何かしようと思ったことの判断を直前で翻すことはよく起きる。このことは、『ライ麦』研究においてはとても秀逸な研究書、『サリンジャー解体新書 『ライ麦畑でつかまえて』についてもう何も言いたくない』（以下、『何も言いたくない』）と『ライ麦畑のミステリー』（以下、『ミステリー』）を記している竹内康浩もその論の中で指摘している。例えば、先の電話をかけようとするがやめてしまうことについて、「そしてホールデンがペンシーを出た瞬間からは、それは「ジェーンに電話しない」というパターンに変わっていく。それは小説の終わりまでこれまたきちんと守られることになる。」（『何も言いたくない』、110）とこうした行動がホールデンのパターンであること

を指摘し、さらに彼のあいさつをしないという行動もそれに加え、5章での雪玉を投げないというエピソードにも着目する。そして、「けれどそんなことよりここでもっと大切なのは、雪玉を投げないことがジェーンにあいさつや電話をしないことと同じ意味だった点だ。見逃してはいけないのは、電話をするとかあいさつをするとかいう普通はセックスすることとはぜんぜん関係ない行為が、すべて「手出しをする、接触する」という点でくくられてホールデンが避けてしまっている、ということなのだ。」(『何も言いたくない』、113-114)と論じ、ホールデンが手出しや接触をしようとするも結局はやめてしまうという特徴を、作品を通して通底しているパターンとして集約的に鋭くまとめている。

このように、ホールデンは何か行動を起こそうとするもその途中で判断を躊躇い、結果翻してその行動をやめるというところが彼の特徴のひとつであると言えよう。そしてこれは竹内が指摘したようにこの作品全体のテーマにも関わってくるので後に詳しく論じることにする。

2 整理学、そしてかたづけとは何か

ではこうしたホールデンの特徴、行動を起こそうとするもその途中で判断を躊躇い結果その行動をやめるという部分、をより深く分析していくために、本稿における独自の考察点かつ中心的切り口でもある整理学、そしてかたづけ、について説明をし、その概念をここで明らかにしておく。

整理学とは加藤秀俊が1963年に出した同名の書籍による概念である。加藤は1960年代当時の視点からの見た現代文明は情報過多な時代であるとした上で、記憶から記録へ、そしてそのために行う分類の重要性を説き、整理という概念に迫る。例えば、「「整理」というと、きれいサッパリ、キッチンと片づいている状態を連想するのは、かならずしもまちがいではないのだが、逆はかならずしも真ではない。きれいサッパリ片づいていることが、すなわち整理ではないのである。」(加藤、84)と論じる。つま

り、「整頓は整理ではない」（同、84）とその違いを明確にする。換言するならば見た目だけ整えてもそれは整理にあらずで、加藤は図書館の例を引き合いに出し、（書籍の並びの）見た目はいびつでも内容に一貫性があるという部分を指摘し、「見苦しいということと、整理されていないということとは、まったく別問題なのである」（同、86）と述べる。それはまた、加藤の次の指摘、「『未整理』もまた整理である」（同、86）に繋がっていく。加藤は日常生活における人々やモノの動きを考えたときに、整理が完璧で、それがそのまま動かないことはあり得ないという考えに立脚している。それゆえ未整理という概念の大切さとその利便性を説く。しかし、未整理としての分類が放っておくだけでは雑然となっていくことも当然考慮にいれており、「ほんとうに未整理のものだけを入れておくには、よほどの強い意志が必要」（同、87）と整理/未整理の決め方に注意を払うようにと釘を刺す。つまり、加藤のいう未整理とは単なる乱雑とは異なり、意識的ないし意図的な未整理（を作り出している）状態は整理という概念とは矛盾しない並置的なもの、あるいは逆説的なものであると位置づけていると言えよう。

そして、この整理学的観点、あえてわかりやすく絞るなら整理/未整理という考え方、をいわゆる「かたづけ」に応用し、そこから単なるモノのかたづけに留まらず、様々なものにかたをつける、「かたづけ」という概念を関戸、森田、柳瀬（2020）は提唱した。これは、前述の『整理学』をはじめ、近年ブーム的に出版が続く「かたづけ」本⁽³⁾など複数のかたづけの関する文献からそれぞれの、あるいは幾多の、概念を概観、概略しながら、いわば哲学でいうところの本質観取的な定義を試みたもので⁽⁴⁾、関

(3) 近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法 改訂版』（2019）、小松易『「かたづけ思考」こそ最強の問題解決』（2018）などの先行研究を参照。

(4) 本質観取はフッサールに依拠するが、日本では西研、苫野一徳、西條剛央らが論文などを通じてその概念を紹介、実践している。執筆者は、西條が代表を務めるエッセンシャルマネジメントスクール（EMS）にて本質観取を使ったワークを2019年に体験した。

戸、森田、柳瀬(2020)はその論文の中で「かたづけ」とは「自分にとって納得感の得られる整理を行うこと」(234)とその定義を示している⁽⁵⁾。換言するならば、ここでいうかたづけとは見た目的な整頓を意味しているのではなく、先にも述べた加藤の「未整理もまた整理」的な考えを抱合した、主体的に作られた整理状態をいう。よって、本人が主体的に未整理を選べば、それは結果として納得のいくかたづけと見なすことも出来る。つまり、逆説的になるのだが、かたづけないと主体的に選ぶこともまた、かたづけの概念上その一部になりうるのである。

3 かたづけたくないホールデン

では前項で記した整理学、あるいは「かたづけ」、それは判断して選択した後に決めるとも言える行為、という観点からホールデンの言動を今一度考察し直してみるとどうなるだろうか。ここではホールデンはかたづけたくない、より正確に言うと、あえてかたづけたくない、という気持ちを持っていると仮定する。それは先の『整理学』に倣うと、主体的ないし積極的に整理ではなく未整理の状態をあえて選んでいる、という立場でもあると言える。よって、本稿ではその立場、具体的には積極的未整理、に立ってここからその行動、言動を検証してみることにする。

本稿最初の項でホールデンの特徴として、行動を起こそうとするものの途中で判断を躊躇い結果その行動をやめるところがあると論じたが、それは整理学やかたづけ的な概念に換言するならば、決めない、つまりは整理しない、いわば未整理の状態をむしろ好んで作りだしていると言える。そしてそれはホールデンの時間への感覚とも関連する。つまり、彼は時間というものに対してかたをつけることを意図的に避けている、これまでの文脈でいうと時間に対してあえて未整理でいようとしているので

(5) なお、「かたづけ」とは「かたをつける」、つまり、判断して選択する、という行為を広意義として指し示してもおり、それは(主体的に)「決める」という行為、言葉とも換言できる概念でもある。

はないだろうかという疑問点を以下、いくつかの場面に沿って考えてみたい。

そうした感覚を示唆している例として、セントラルパークのアヒルと魚が挙げられるだろう。最初にこの話題が登場するのは9章で、タクシーに乗ったホールデンは運転手に『《セントラル・パーク・サウス》のすぐ近くにあるあの池に家鴨がいるだろう？あの小さな湖さ。つかぬことを聞くけど、もしかしたら君、あいつらが、あの家鴨がさ、池がみんな凍っちゃったとき、どこへ行くか知らないかな？』（95-96）と聞く。このときはこれ以上話は発展せずこの問いかけのみで終わるのだが、12章で再びタクシーに乗るとホーウィッツという名の運転手にまたもや同じこと、「ひょっとしたら君、あれが冬にはどこに行くか知らないかな？」（128）と尋ねる。先の運転手と異なり、ホーウィッツはその問いかけに対して答えはするものの、「魚はどこへも行きやしねえぞ。あいつらは、てめえたちがいるところから動くもんじゃないねえ、魚ってやつはな。湖の中から動きやしねえよ」（129）とやや噛み合わない内容の返答をする。こうした一連の家鴨や魚への言及について竹内は「そのアヒルの行く先の問題が、小説の最後に至るまでホールデンの行動とパラレルになっている。」（『何も言いたくない』、204）とその関連性を指摘した上で、「雨の中にとどまるホールデンに近いのは、池からいなくなってしまうアヒルよりも、池の中にとどまりつづける魚の方だといえるだろう。」（同、206）と家鴨よりもむしろ魚の存在の重要性を指摘する。さらに博物館のガラスケースとも重ね合わせ、「静止しているものがガラスケースの中にある、というこのイメージは、そのまま氷に閉ざされた凍った魚のイメージとも共鳴しあうだろう。ガラスケースと氷という似たようなものなかで、博物館の展示物も、凍った魚も、完全に静止している。そして博物館のこの停止が時間の停止でもあったことを想い起こせば、流れ去る水や降り注ぐ雨が氷となって静止することで時間の流れさえも止まっているような、そうした時間超

越的な空間に凍った魚はいることになる。」(同、207)と時間と魚がなぜ重要なのかについて詳細に分析している。そして、「そんな凍った魚は、生と死の中間点にいる。」(同、207)という表現を用い、ホールデンを凍った魚として捉えている。この竹内の論考は、つまるところホールデンには時間の進行がない、ということになる。本来であれば時間は流動的なもので絶えず過去、現在、未来と進行していく(ように思える)のだが⁽⁶⁾、ホールデンは現在、いまここ、の一点から動かない、動けないのだ。これを先の整理学とかたづけの概念で考えるならば、流れる時間に対してかたをつけない、少なくともいまこの瞬間においては時間というものへの姿勢を未整理の状態にしておきたい、となる。

この時間的はどこからも、あるいはどこへも、動けないというのは、妹のフィービーに問われて語るかの有名なこの小説のタイトルにもなっている、22章のライ麦畑のつかまえ手になりたいという場面、「僕のやる仕事はね、誰でも崖から転げ落ちそうになったら、その子をつかまえることなんだ。(中略)一日じゅう、それだけをやればいいんだな。ライ麦畑のつかまえ役、そういったものに僕はなりたいんだよ。」(269)でもその構造は同じである。ライ麦畑で遊んでいる子どもたちをイノセント、フィービー的なナイスな存在と捉え⁽⁷⁾、オトナという崖の下の世界に落ちないように彼らを守りたいというホールデンの想いは、端的に言うと子どもたちの時間軸をどこにも動かしたくないという彼の意志表示でもある。そしてそれはまた、そんなホールデンが自分自身をも救って、つまりはつかまえて、ほしいと思っていることでもあり、これは竹内がすでに「ホールデンは誰かにつかまえてもらわなければならない。」(『何も言いたくない』、

(6) 時間に関する詳細な考察としてはたとえば入不二基義の『時間は実在するか』などがある。それらを踏まえた上での時間と文学への考察はまた別の機会にて詳しく論じる。

(7) ホールデンとフィービーとの関係性については拙論、「ライ麦畑ではげまして—『ライ麦畑でつかまえて』と励ましとの相関性に関する一考察」(2021)にて論じている。

178)と指摘していることでもある。よって竹内の「ホールデンは凍った魚」に倣うならば、いまこの瞬間におけるホールデンの時間の概念はどこか別の場所ないし軸へと動くことを決めない、時間の動き、あるいは流れというものを飛び越えて存在しようとしていることになりはしないだろうか。

さらに、物語の後半、25章に登場する回転木馬の場面についても考えてみる。ここは妹のフィービーが回転木馬に乗り、ぐるぐる回るその姿を見てホールデンが幸せを感じるという、ある種物語のクライマックス的な場面である。同じところをぐるぐる回るというのは物理的な場所の移動がないようにも取れるし、また幸せを感じるホールデンが一瞬の恍惚状態にあるようにも取れる。なおフィービーが回転木馬に乗ることに関して「落ちるときには落ちるんだけど、なんか言っちゃいけないだよ。」(328)というホールデンのセリフに対して批評家や研究者の間で解釈が分かれるところでもある⁽⁸⁾。この場面に関して竹内は「ジェーンにあいさつや電話をしないこと、雪玉を投げないこと、博物館の展示物には触ってはいけないこと、子供のシーソーにも触ってはいけないこと、などをとおして「触らないことでイノセンスを守る」という主題がこの小説を貫き通していて、その延長線上にこの場面はあるのだ。」(『何も言いたくない』、190)と作品全体を流れる主題のようなものと絡めて論じつつ、さらに「「行動すること」と「行動しないこと」が一体化する現象こそが、これまで述べてきたような主体と客体の反転・一体化と対になっている行動様式なのだ。」(『何も言いたくない』、191)と指摘している。竹内の論は究極的には「過去と現在、生と死、男と女、大人と子供、という二つの対立するものの境界が取り払われ、すべてが往復可能な解放された状態の中にホールデンはいるのだ。」(201)と結ばれているのだが、本稿では特に時間軸が

(8) この点については竹内が「実際、ここを議論して、ホールデンが最終的にライ麦のキャッチャーになるのかならないのかがよく問題になる」(190)と指摘している。本稿においてはその議論を直接したいわけではないのでその部分に関しては割愛する。

混然一体となっているところに着目したい。先に述べた整理学の観点からすると、たとえば過去と現在に境界線を引き、ふたつの異なるものと考えるのであればそれは時間を整理していることになる。逆に、その境界を取っ払って不可分なものと捉えるならば、それは過去と現在という両者を未整理なものとして判断することになる。とするならば、もう明らかなように、ホールデンにとっての時間とは未整理に属するものであり、それが先にも言及したライ麦のキャッチャーになりたいという場面や回転木馬の場面にも一貫して現わされているのだ。そしてそれがゆえに、竹内の言う「ホールデンは凍った魚」、つまりホールデンは時間の未整理状態にいる、はより説得力を持つことになる。

こうしていくつかの場面に散りばめられている時間への記述とホールデンの姿勢はパラレルに展開しつつ同一の意味、どこからも/どこへも動けない、を付与されており、結果として彼の時間は「凍ったまま」となる。とはいえ現実的に考えて生きている人間の、心理的ではなく物理的な時間を凍らすことは誰にも出来ない。それは現実世界において矛盾をきたすことになる。なぜなら一般的に時間は過去、現在、未来へと時間は流れのように考えられているからだ。たとえば、片づけ本としてかたづけの定義を研究する際に参照した『人生がときめく片づけの魔法』において近藤麻理恵はモノに対して選べる道は三つあるとして、「今向き合うか、いつか向き合うか、死ぬまで向き合わないか。」(近藤、247)と読者に選択を迫り、今を推奨している。それは無論、人生の流れとしての時間軸を考えたときには至極真っ当な正論ではあるものの、あくまで上記のように過去、現在、未来という考えを前提として、その中に未来があることを想定しての文脈において今という時間を位置づけている。しかし、ホールデンはそうした線的な流れで時間を捉えているのではなく、上記の近藤からの選択であれば、それらのどれも選ばない、あるいは選ばない、つまり積極的未整理をしたい、と答えるではなかろうか。それこそがホールデンの、いや、

作者であるサリンジャーの狙いではないのかと竹内は以下のように指摘する。「矛盾してしまう二つの状態が同時に沸き起こってきて、もうどっちがどっちだか決定できない状態こそが、この小説の目指しているものなのではないか、という気がしてくる。」（『何も言いたくない』、124-125）これは竹内のもうひとつの研究書、『ライ麦畑のミステリー』でもそれは受け継がれ、かつさらにもう一步踏み込み、読者と作品との一体化こそが真骨頂であるとし、「ホールデンが読書を生きていたあの瞬間、彼は同時に私たちに向かって、『ライ麦』を生きるよう誘っていたのである。」（『ミステリー』、217）と論じる。これは換言するならば様々なもの、例えば作者と読者、過去と現在、現在と未来など、の境界線の喪失が起きていると言える。

よってホールデンは、これまで見てきたように意図的に時間に対してかたをつけない、過去へも未来へも動けず、いまここに留まり続けることで時間的な未整理状態を作り出していると結論づけられる。それは、小説そのものも1章と最終章である26章が語りの時間としての現在の時間軸に置かれており、結局ホールデンの現在の時間は何ら進んでいないということでもある。やや繰り返しになるが、時間的な未整理状態を保ち続けることこそが実はホールデン流のかたづけで、あえてかたつけないことで彼なりのかたづけ(未整理)を成り立たせているように思えてくる。つまり、ホールデンのかたづけたくないというのは逆説的かつ積極的な我流のかたづけであり、それは未整理であることで整理するという、これまた竹内が示唆するところの境界線の喪失の境地に彼は立っていると言えるのではなからうか。

おわりに

本稿では、まずホールデンの言動を判断に着目して確認することを試みた。そこで明らかになったのは、行動を起こそうとするもその途中で判断

を躊躇い結果その行動をやめるという特徴であった。そして、整理学、かたづけ、という概念についてそれが如何なるものであるのかを記した後、そうした観点からホールデンの言動を捉えてみるとどのようなことがわかるのか、についていくつかの場面を具体的に引き合いに出しながら考察してきた。そして、整理学の中で「未整理もまた整理である」という考え方があったように、ホールデンは「かたづけない」という判断をすることで「かたづけ」ようとしている、竹内に倣うなら「つかまえない」ことで「つかまえる」、と平行になり、それはホールデンの今この瞬間の状態をそのまま、作品内で言うところのセントラルパークの池の凍った魚であるかの状態、をあえて選択し、そうすることで彼なりの時間へのかたづけを体現しているのではないだろうか、と本稿における結論に到達した。

このように『ライ麦』の内容とホールデンの行動、特に時間に対する概念、それを整理学やかたづけの概念と対比的に見ることでもって、両者に通底しているものを顕在化することが本稿の目的であった。これまで論を進めてきたことでそれ、つまりはかたづけたくないホールデン、が炙りだされたのであれば、本稿の目的は達成されたとしてここで筆を擱くことにする。

参考文献

- J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye* 『ライ麦畑でつかまえて』、野崎孝訳、白水社、1984年。
加藤秀俊、『整理学』、中公新書、1963年。
近藤麻理恵、『人生がときめく片づけの魔法 改訂版』、河出書房新社、2019年。
関戸冬彦、森田敦子、柳瀬真紀、「オンラインコミュニティ空間を通しての行動変容、－「かたづけリフレクション」を例にして」、マテシス・ウニヴェルサリス第22巻第1号、2020年。
竹内康浩、『サリンジャー解体新書 『ライ麦畑でつかまえて』についてもう何も言いたくない』、荒地出版社、1998年。
竹内康浩、『ライ麦畑のミステリー』、せりか書房、2005年。

(本学法学部准教授)